

# 「復興から日本再生へ」 ～埼玉の挑戦～



埼玉県知事  
社会福祉法人  
埼玉県社会福祉協議会 会長

## 上田清司

新年明けましておめでとうございます。皆様には、健やかに平成24年の新春をお迎えのこととお喜びを申し上げます。

新しい年は、一刻も早い東日本大震災の被災者の皆様の生活再建と被災地の復興を果たし、そしてその先に新しい日本を築いていく、そんな1年にしたいと思います。

原子力発電所の事故によって、電力エネルギーの3割を原子力に依存しているという実態が浮き彫りになりました。私たちは、今こそ再生可能エネルギーの活用や未来型省エネ技術の開発と、それらを生かしたまちづくりに取り組む必要があります。本県では、エネルギーの地産地消に市町村単位で取り組むエコタウンプロジェクトを進めています。

これから新しい日本を築いていく上で、新しい産業を育てていくこと、誰もが働きやすい社会をつくること、そしてアクティブな健康長寿社会を築くこと、この3点が鍵になると思います。

新しい産業を育てるために、県内企業が持つ高い技術力をグローバルな舞台で生かすイノベーションの支援を進めていきます。

また、イノベーションの鍵は人材です。県では10億円の基金を設けて、グローバル人材の育成に取り組んでいますが、更にこの取組を充実させて、人材育成面からイノベーションを支えていきます。

北欧諸国では、女性の高い就業率が家計所得と消費を押し上げ、経済を元気にしています。これを手本に女性の社会進出を図るため、県と経済界、労働界が一体となって、誰もが働きやすい埼玉づくりを進めていきます。

国民医療費の約3分の1が生活習慣病によるものと言われており、その対策を徹底することができれば国民負担を大きく減らすことができます。意欲ある市町村が本気になって取り組めば、大きな成果が期待できます。医療費を減らすだけでなく、高齢者が社会にアクティブに参加していく健康長寿社会の枠組みを市町村と一緒につくっていきます。

これらの取組はまさに大きな挑戦です。素晴らしい企業と人材が集まる埼玉ならそれができると信じています。

県民の皆様、地方からこの国を変える埼玉の挑戦にぜひ一緒に取り組みましょう。

### 特集 インタビュー

# 心豊かに生きる

## 葉祥明の世界を訪ねて

心がほっと温かくなる作品を作り続けている絵本作家の葉祥明さん。  
新しい年の初め、彼の作品を通して温かい気持ちになっていただければと思います。

—葉祥明美術館は、訪れた人が我が家のようにくつろいで、安らぎのひと時を過ごしてもらいたい、というコンセプトで造られているそうですね。

—ここはミュージアムハウスという

ことで、訪れた皆さんに絵本の中に入ってもらおうように造ってあります。橋を渡るとヨーロッパの小さな公園をイメージした庭があり、古い洋館に入っていきます。ここには画家で絵本作家で詩人のお父さんと、

お母さん、10歳の女の子リラちゃん、5歳の男の子クロードくんという、イギリス人のファミリーが住んでいるんですね。  
—美術館自体が物語の世界観を持っているんですね。

いわゆる美術館だと外光を抑えた広い空間に絵がかかっていますが、ここにはソファアがあって本も置いてあって、子どもたちの部屋があって、くつろいだひと時を過ごしてもらいたいと思っています。それから、庭のベンチに腰かけて木々の変化も楽しんでもらいたいですね。  
—故郷・熊本県の阿蘇にも美術館があって、ここ鎌倉の美術館は今年で20周年を迎えられたということですが、これらの美術館は先生にとってどんな場所なのでしょう。

—とても重要な場所ですね。

—全国各地にいい景色のところがいっぱいあるんですが、生活の中で

見ているとあまり感動しないで通り過ぎてしまうんです。でもこれが絵になったり、詩になったり、小説の舞台になったりすると意識が変わってくる。だから僕はいい景色のところに行って絵や詩を書いて、みんなに見てもらいたいという気持ちがあったんですよ。日本中の景色のいいところに美術館を造るのが僕の夢だったんだけどね。(笑)。  
—美しい景色を絵にしたいという思いがあるんですね。

に現実の花を見ると、見方が深くなるでしょ。芸術の持っている力でしようね。  
僕は風景画を描くことが多いですけど、芸術っていうのはそのものの本質を引き出すんですね。深さが違う。だから見ている人が感動するんですね。  
—その時の気持ちによっても違って見えます。  
その絵や音楽が、気持ちを引き出すってことですね。それが芸術の力でしようね。だから責任重大ですよ、芸術家は、自分が作り出したものが世の中にどう受け取られるか。そして、気に入って見てくれた作品

は、もうその人のものなんです。ノスタルジー、懐かしいという気持ちを感ずるとか、一人ひとりがその作品を自分の世界と想ってくれていいんです。  
—それぞれ捉え方が違っていいということなんです。  
絵本の世界がいいねとみんながいうのはそこなんです。赤ちゃんにもお母さんにも、若い人もお年寄りも、それぞれが温かさや懐かしさを感じて心がほっとする、絵本には普遍性があるんですね。  
—絵の特徴である、この温かくて優しいパステル調の絵はどのように生まれてきたんですか。

僕は昭和21年の戦後生まれ。その当時日本はグレーの印象だったんですね。そんな僕が小学校高学年の時、ディズニーの映画を見たんです。その時の「このきれいな色は何だろう」という色に対する感受性が僕の意識下において、きれいな明るい色を作ることを追及していったんです。それがきっかけですね。  
—最初からパステルカラーというのを使われていたんですね。  
パステルカラーって印象派から出てきたんです。絵画の中での色の使い方はほかにはないからね。モネたち印象派の人たちが光を求めて、波長の高いパステルカラーっていう



### 葉 祥明 (よう・しょうめい)

本名:葉山祥明

- 1946年 熊本県生まれ。立教大学経済学部卒。
- 1970年 ニューヨークのアート・スチューデントズ・リーグに留学、油絵を学ぶ。
- 1972年 初めての絵本「ぼくのべんちにしるいとり」出版。イギリス・フランス・スウェーデンで発刊。
- 1990年 創作絵本「風とひょう」イタリヤ・ポーランド国際児童図書展グラフィック賞受賞。英国アン女王に原画を献呈。
- 1997年 絵本「地雷ではなく花をください」日本絵本賞読者賞受賞。
- 2000年 長崎原爆絵本「あの夏の日」第6回平和協同ジャーナリスト基金賞奨励賞受賞。

絵本のほか、画集・詩集・エッセイなど著書多数。地球上のさまざまな問題をテーマに創作活動・講演会などを行っている。





過ぎたことを  
悔やむのはお止めなさい  
人生は  
常に今日が  
新たな出発点！  
いつもすっきりした心で  
スタートラインに  
立つのです

▲春の風



どんなことがあったとしても  
今までなんとか生きてきたのに  
今なお、この先どうなるか  
心配ばかりしてますね  
大丈夫！ 今度も何とかなるから  
心配しないで！

▲ジェイクとドルフィン

て、今の人生で見聞きし、考えること  
とでより引き出されたり深くになると  
考えているんです。  
そしてまた僕は戦後生まれという  
のが大きいと思ってます。当時の平  
和とか戦争に対する時代の空気、嫌  
悪感とかが意識の中にあって、そし  
て僕は絵本作家となり、それが課題  
となったんですね。  
だからそれぞれの人が課題を持つ  
て生まれ変わってきていると思ってい  
ます。  
―では、地球環境などに対する問題  
意識というのは。  
子ども時代からSFっていうのが  
好きで、僕は地球上で生きていくの  
で、地球や人類や動物たちの危機を  
マジで考えるわけです。そして、  
いろんな問題が僕の中で宇宙的なス  
ケールで反応しちゃうんですね。  
僕の中にそうした意識  
がいっぱいあって、ミク  
ロからマクロまでシナプ  
スがあちこち張り巡らさ  
れていて、何かあった時  
にそれが関係づけられて  
出てくるんです。だから  
テーマはきっかけに過ぎ  
ないんです。  
―最後に伺いたいので  
すが、葉祥明さんに  
とって「心豊かに生き

明るさを増す色を追及していったん  
です。そんな印象派の人たちが出し  
た成果、それを僕なりに追及する  
という気持ちがあるんですね。  
そしてパステルカラーって女性や  
子どもたちは好きですよ。赤ちゃ  
んがお母さんの胎内にいたときの世  
界は別次元の光の世界、パステルカ  
ラーの世界なんです。だからそうい  
う色のものに包まれていると気持ち  
いいんでしょうね。  
僕の絵はパステルの色を使って描  
いているから、男の人にはあまり受  
けられないけど（笑）、女性に好ま  
れるんですね。  
―絵のほかにも詩や文章を書かれて  
いますが、人々の心に響く言葉はど  
のように生みだされているのでしょ  
うか。  
僕は詩を左脳でこねくり回して  
作っているんじゃないんです。僕の  
場合、ある「気配」が詩人（僕）の  
ところにふっと波のように降りてき  
て、それが言葉に転換されて書かれ  
たものなんです。そして、多くの  
人が分かりやすい表現を生み出すフ  
ィルターが僕の中にはあるようなん  
です。だから受け取る皆さんが一人  
ひとり好きなように味わっていただ  
ければいいと思っています。  
―考えて、作り出したものではない  
ということですか。



北鎌倉葉祥明美術館  
神奈川県鎌倉市山ノ内318-4 TEL:0467-24-4860  
美しい原画の数々、言葉の数々を通して疲れた心を癒し、安らぎのひと時を過ごせます  
オフィシャルHP▶ <http://www.yohshomei.com>

「とは、どう（う）こと（う）でしょう。」  
毎日いろんなことを考える。見る  
もの聞くものを面白がったり、感動  
したり。小学校1、2年生ぐらいの  
子どものような感性ですね。それが  
あれば生き生きとした豊かなもの  
になるでしょうね、毎日が。そうはい  
かないっていうのもわかりますが、  
お金とかものではなく豊かさはすこ  
く身近にあるんです。  
―でも年を重ねると、新しいことを  
やろうという気持ちになるのはなか  
なか…。  
だから60過ぎたら還暦すればいい  
んです。子どもに戻ればいい。子ど  
もの時代の自分に戻れば世界がキラ  
キラと再び輝き始める。僕の絵を見  
てそんな子どもの頃のことを思い出  
してくれればいいですね。

そう。僕を通ってきたものなんで  
すね。  
モーツァルトなんかもそう。音楽  
は、彼を通して出てきたものなんで  
す。もちろん芸術作品の中には脳を  
使って作られたものもあります。で  
もすごいのは、人間の脳を介しな  
いで生まれてきたもので、それこそ  
本物の芸術なんじゃないかと、神  
が宿った作品だと思っています。  
ただそれにはやはり技術が必要  
で、当然それまでに詩を書いたり、  
読んだりといった蓄積は必要です。  
詩集を読むのも好きだったんだけど、  
詩は20歳過ぎくらいからずっと  
書いてきましたね。というのは詩の  
フィルター、色彩のフィルターとい  
った、フィルターを通してこそ人  
間が理解できる芸術になるわけで、  
だから芸術家はそういう境地で日々  
生きているわけです。  
―作品には社会派のテーマを扱った  
ものもたくさんありますが、それら  
は元々ご自身の中にあっただけ  
でしょうか。  
人間で真っ白なものとして生まれ  
て人生経験をして性格が形成され  
るって皆さん思われていると思うん  
ですが、僕はもう生まれた時点で出  
来上がっていると思ってるんです。僕  
は生まれ変わってもものを信じてい  
て、だからそういうベースがあっ